関東学院大学

http://univ.kanto-gakuin.ac.jp/

〒236-8501　神奈川県横浜市金沢区六浦東1-50-1　広報課：TEL.045-786-7049　FAX.045-786-7862　2020年11月発行

関東学院大学研究報
Vol.4

Research Expectations

特集：新しい生活様式

関東学院大学

生活様式を
見つめ直してみましょう。

2020年初頭から世界中を震撼させている、新型コロナウィルス【COVID-19】。
このウィルスにより、社会は大きな変化を余儀なくされました。
世界の人々はロックダウン（都市封鎖）、外出自粛、在宅勤務・学習などを経験。
当たり前だと思われてきた生活や常識は一変し、新しい生活様式や従来にないビジネス、これまで気づかなかった新しい価値観があらわれてきました。

そして、今だからこそ仕事の仕方を見直してみようといった機運が高まっています。
実際に在宅勤務や、遠隔地からでも円滑に仕事が進められるかの検証が進んでいます。
同じように、生活様式も見直してみてもいいのではないでしょうか。

これまでよりも自宅で過ごす時間が増えるなど、生活スタイルの変化に伴い新たな環境が必要とされるようになりました。それは住生活環境だけではなく、ソーシャルディスタンスと言われる一人ひとりの距離にも求められています。

一方、ビジネスや教育、医療など様々な場面でオンラインへのデジタルシフトが加速。
リアルな場の業務や生活から、直接人と接触せずにテクノロジーを使ってコミュニケーションを図る日常が突然身近になりました。

生活様式を変えることには、戸惑いや何が正解であるかが分かりづらいことも多くあります。
研究というのは、必要に迫られた時に大きく前進するものです。
関東学院大学には、私たちの未来の社会や日常の在り方に真剣に向き合う、研究者たちがいます。
研究者の考える未来の姿、その一端を、本冊子を通じてご紹介します。

今だからこそ見つめ直してみたい、
未来の社会や日常の在り方

新型コロナウイルス騒動がもたらした変化について

半年ほど前までは、きっと世界中の誰も今の生活スタイルを想像してはいなかったでしょう。日本に住む私たちは、東京で五輪が開かれ、海外から多くの人々が日本を訪れる2020年の姿を当たり前のものと思っていたはずです。しかし、私たちの日常がもと通りになるにはまだまだ時間を要しそうです。COVID-19（新型コロナウイルス）の流行を経て、私たちは「新しい生活様式」を余儀なくされています。

もちろん研究者にとってもCOVID-19、そして「新しい生活様式」は大きな影響を及ぼしています。これまで人々の日常に関わる事象を深く見つめ、好奇心と探究心をもって課題の発見と解決に取り組んできた研究者たちに、話を聞きました。

――昨年度末から続くCOVID-19の流行は、みなさんにも大きな変化をもたらしたのでは？

（折田）中学高校で行う予定だったネットリテラシー教材の実証が、一斉休校に伴い全てキャンセルになりました。他にも、私の研究テーマに関しては、AI美空ひばりさんのような、生前のデータとVR技術を用いた故人の復活という取り組みについても風向きの変化を感じています。これまでは時期尚早という見方が強かったのですが、今回の新型コロナウイルスの感染拡大では、近親者ですら、感染者の最期に立ち会うことができず、また葬儀もできないため、データを用いた追悼を前向きに捉える話が欧州の研究者との議論の中で出てきています。

（古賀）私も、調査のために長く関わりがあった施設が出入り不可になったため、研究そのものは休止状態です。とはいえコロナ禍ならではの気づきもありました。「ステイホーム」と言われはじめた頃はネットがあるから家でも変わらず仕事ができる、子どものそばに居られる状況を前向きに捉える話も聞きました。しかし、そのうち家にずっと家族がいる状況に辛さを感じたり、感染を警戒し続ける日々に気疲れしたりしていますよね。やはり既存の家屋や施設はそのままに生活スタイルだけを変えるのは無理な部分がある、ということも分かってきました。

――感染症対策として、生活する上で必然的だった“接触”という場面に変化を求められる状況に世界中の人が直面しています。私たちの生活において、将来的にこのまま変わってしまうものって、あるのでしょうか。

（山下）昔から人間は冠婚葬祭や会食など、場を共にするイベントを大切にしてきました。確かにコロナ禍で「人と人との接触」はやりにくくなっていますが、本質的に人は繋がりを求めるものです。SNSやインターネットなどのデジタル技術が進歩したことでリアルな触れ合いと代替可能になることが増えるという変化はあるものの、それはもともとあった流れが加速しただけ。根本的な人間の価値観や生活スタイルは変わらないのではないでしょうか。

（飯尾）私は現在スマホのアプリを用いた小児慢性疾患患者の生活支援を研究しています。慢性疾患は長期的な治療や管理が必要され、良好な状態を長く維持すること大事になります。そこで通院時に直接会って状態を細やかに確認する直接的な支援に加え、自宅でも患者本人がスマートフォンを操作するだけで間接的な支援を受けられるアプリがあることで、接触の機会を減ったとしても、バランスのとれた支援ができるのではと考えています。

（古賀）対人距離には関係性によっていくつかの距離感があると言いますが、昨今話題の「（人との間隔は）２m」って、極端にフォーマルな距離なんです。「新しい生活様式」という言葉が促す距離感は、人が本質として持つ感覚に対してある意味挑戦的とも言えます。言葉の問題かもしれませんが、「新しい生活様式」というとずっと続くような気がしてしまうので、いつか元に戻るという希望を込めて「緊急事態を乗り越えるための戦略」といった方が、私はホッとします。」

#STAYHOME

「オンライン」との付き合い方と、今後への前向きなつながり

この半年の間で劇的に変化したものの一つに「デジタルツールを用いたオンラインでのやり取り」をあげる人は多いのではないでしょうか。大学はもちろん、企業も、そして家族の間でもこれを利用してリアルタイムにやり取りを行う機会が増えました。「新しい生活様式」と相性の良いデジタルツールですが、一方ではどうしても満足できない部分も見えてきているようです。

――他人との距離感を考える上では、相手との関係性や信頼感も重要になりそうです。今年ほど日常的に「オンライン」という言葉が飛び交うこともなかったかと思うのですが、インターネットの存在はとても大きいのでは。

（折田）相手との信頼がネット上での関係でも構築できることは、社会心理学の分野で1990年代から言われてきました。顔が見えない状況であっても、交わされるコミュニケーションの質や量が信頼関係を育てるわけですが、その先にはいずれ「会いたい」という感情が芽生えます。物理的な距離を補完する意味でネットは役立ちますが、その先にある「会いたい」という感情をどう考えるのかは今後の課題になるのかもしれません。

（山下）私は大学で語学も教えているのですが、外国語との向き合い方には大きな変化が生まれています。ネット翻訳が普及したことで教える側として抱える悩みは大きいのですが、ネット配信する授業の動画に後から字幕を加えることができるようになったことは、語学に苦手意識のある学生や聴覚障害を持つ学生には大きな追い風になっています。

（飯尾）座学の授業では概ねオンラインでも対応できたのですが、看護学部は技術を教えることも重要になります。オンラインDVDを使って授業をしてみたものの、やはりオンラインで実技を教えるには限界がありますね。

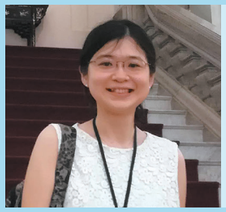
――今の状況が生みだす変化には、プラスマイナスの両面があると思います。できれば現状の混乱を経て生まれる良い変化が、新しい日常での幸せにつながることを目指したいですよね。

（折田）プラスとマイナスは背中合わせ。時と場合に応じた方法で、個人同士だけでなく学校や職場とつながれることは大きな可能性を秘めています。ただ、学びの場や働く場を自宅とつなぐという状況は、本来パーソナルな場である家に学校や職場が「侵入」しているとも言える状況です。学びの場や働く場の拡張に合わせて守るべきプライバシーを再確認せねばなりません。

（古賀）降って湧いた「新しい生活様式」はコロナ禍という苦境を乗り越えるために必要かもしれませんが、ずっと続いていくことには共感しにくいなあと感じています。そんな中で、日々の生活に変化を生むのであれば、明るい未来を目指してひらけていくような感覚が欲しい。デジタルツールの活用は他人や周囲の環境と関わりを持つ可能性を増やしますし、関わりを持つことから生み出される日々の刺激は健康にも繋がります。短期間にいろいろな変化が一気に起こって混乱をきたしたものの、徐々に変化の良し悪しや課題が見えはじめてきました。これまでに起こった現象を科学的に丁寧に捉えれば、パラダイムシフトというほどではないが、日常において大きく変わる部分が出てくるかもしれないと感じています。

折田 明子
AKIKO ORITA
人間共生学部 コミュニケーション学科 准教授
［ 学 位 ］博士（政策・メディア）
［専門分野］情報社会学、経営情報学

古賀 紀江
TOSHIE KOGA
建築・環境学部 建築・環境学科 教授
［ 学 位 ］博士（工学）
［専門分野］人文・社会、デザイン学



山下 里香
RIKA YAMASHITA
経済学部 経済学科 准教授
［ 学 位 ］博士（文学）
［専門分野］言語学、社会言語学

飯尾 美沙
MISA IIO
看護学部 看護学科 講師
［ 学 位 ］博士（人間科学）
［専門分野］小児看護学、健康心理学

建築・環境学部 建築・環境学科 教授 古賀 紀江

人が暮す環境を見つめると、その人の生活スタイルや個性が見える。

より豊かな生活に必要な“環境”を見つめる研究

目覚まし時計に冷蔵庫、西日が差し込む窓にほのかな暖色系の壁紙…。少し周囲を見回してみると、私たちが何気なく送っている日々は、実に様々なものに支えられていることに気づかされます。そんな、日常を取り囲む「環境」が私たちの暮らしにどのような影響を与えるのかについて研究を続けているのが、建築・環境学部教授の古賀紀江です。「一番力を入れているのが、働くための環境や、人の元気を支えるような居住環境についての調査・研究です。大学院時代からずっと、高齢者の住居や施設などのフィールドに出向いて調査を行い、人を取り囲む「環境」とそこに暮らす人間がどのように関わっているのかについて考えてきました」と、古賀は自らの研究について話します。

例えば泊りがけの旅行をすると、到着直後と翌朝とでは宿泊する部屋の様子は様変わりしてしまいます。しかしこの変化は、泊まる人によってそれぞれ異なるはずです。人が暮す環境を見つめると、その人の生活スタイルや個性が見えると、古賀は話します。「活発な大学生と高齢者では、行動の量も内容も違いますよね。人の状態が違うということは、生活を支えるために必要な環境も異なってくるわけです。人の生活や行動に焦点を当てて、より快適に生活できるように人を取り囲む環境デザインの在り方を考えるための調査・研究を続けています」。

環境へ順応する難しさと、「新しい生活様式」が持つ違和感

建築学だけでなく心理学や社会学的な側面も持ち合わせる研究に取り組む古賀は、コロナ禍を乗り越えるため、短期間で“新しい生活様式”に生活環境を変容させるための私たちの日常生活そのものに着目しています。引っ越しや災害による非常事態下での避難などによる日常環境の急激な変化は時として「危機的移行」という大きな負のインパクトを与える変化となります。実は、新しい生活様式で生じた事態は危機的移行の状態に近いのではないかと感じています。「状況変化に対して、子どもは比較的短時間で順応できるのですが、歳を重ねるほど過去の経験や習慣が関わってくるため、容易には順応しにくくなります」。

ここで言う「危機的移行」は引っ越しをしたり、あるいは自然災害による日常環境の変化のように周辺の状況に、視覚的な変化はありません。見かけ上は、生活する中で周辺環境に変化がないのに、振舞い方を変えることが「求められる」ようになったという点が特徴です。感染症対策として、現状では周囲の人との間に2mの「社会的距離（ソーシャルディスタンス）」を取ることが推奨されていますが、実はこれは、実に大きな環境移行であると古賀教授は力を込めます。「他人との距離の取り方は、相手との関係性を図る上で心理的に重要な意味を持ちます。2mという距離は極端にフォーマルな意味合いを持つ間合いです。もともとその距離が持つ意味合いを考えると『２ｍの距離を取りましょう』と言うのは、私たちが慣れ親しんできた感覚からするとかなり厳しい状況だと言えます」。

取り囲む環境の変化を、プラスに変える技術

人間と環境の関わりについて研究を続ける古賀に、今の状況はどう映っているのでしょう。「私たちの生活で大きな割合を占める『働き方』はリモート化という大きな変化を見せましたが、では仕事を行う時の環境はどうでしょう。

人の働き方に自由度が増せば、これまで職場で縛られて居住地にも変化が現れるでしょう。リモート勤務が進み、稼働年齢層が居住地域に滞在する時間が増えれば、地域社会のあり方にも変化が現れる可能性があります。「地域コミュニティの希薄化が叫ばれて久しいですが、住んでいる場所に働ける環境を設けることでコミュニティが抱える問題の解決につながるかもしれません。環境の変化は人の行動と密接に関わっています。ただ生活を我慢するような変化ではなく、他の社会問題まで解決できるような前向きな変化にしたいですね」、と古賀は今後に向けて展望を広げます。

人間共生学部 コミュニケーション学科 准教授 折田 明子

使われ方を意識して残す、個人のデジタル情報

私たちは日々インターネットを使って多くの情報を受発信しています。SNSが台頭する現在は、時に複数の「名前」を使い分けて情報をやり取りする人も少なくありません。そんなネット上でのアイデンティティや情報プライバシーの問題に深く切り込む研究を行っているのが、人間共生学部准教授の折田明子です。「学校や仕事場などの外の世界と、家族にしか会わない家の中では、それぞれ見せる顔が異なるのではないでしょうか。インターネットを介したコミュニケーションでは、多くのユーザーが自分を表す「名前」を自分で選び、アイデンティティを使い分けています。自分の見せ方を変えながら、多層的な人間関係のネットワークで繋がりあっているわけです」と、折田は話します。

人との多様な繋がりを可能にするSNSですが、サービスの裾野が広がったからこそ起こる問題もあります。一度ネット上に放った情報は、たとえその人が亡くなった後も残り続ける可能性が高いのです。また、AIを用いれば、今や遺したデータから故人の思考まで再現することも技術的には可能になりつつあるようですが、どの時代のどんな場面で遺したデータを用いるかという意思決定に、故人は関わることができません。この『遺された情報』の利用やプライバシーに関係する問題についても、折田は取り組みを始めています。「技術的には可能な話だとしても、法的課題や倫理的課題についてはまだ十分に議論されていません。目先の話題として急くことなく、着実に議論を重ねて進める必要がある課題だと思っています」。

実世界に影響を与えずに本音を出せる場を持つことは、日々の支えになること

匿名の情報だから残せる、時代の証

コロナ禍においては、直接人との接触を避ける代わりにインターネット経由の情報発信やコミュニケーションが活発に行われました。もちろん前向きなものもあれば、出口が見えない状況への不安や不満もやり取りされています。中でもTwitter上に書き込まれた投稿の中には、実名だと書き込みにくいであろうものも散見されました。インターネット上の「名前」を用いて実世界に影響を与えずに本音を出せる場を持つことは、日々の支えになり得ると折田は話します。

「コミュニティに応じて『名前』を使い分けることで、時には悩みを吐露したり本音をこぼしたりしやすくもなります。こうして世に出た情報は、時代を映し出す『市民の本音』です。デジタルデータとして後世に残ることは、歴史的な観点からも重要だと考えます」。しかし、折田が2018年に学生対象で取ったアンケートでは、自分の死後にSNSへ遺した情報は消去したいという人が半数ほどにのぼっています。「本当の『本音』を記した情報が、ユーザーの死後消されてしまうのはあまりにも惜しい。プライバシーを守りつつ、どうしたら残せるだろうかと考えています」と、折田は話します。

5Gがもたらす変化と、新しくなる日常

インターネットが一般普及してからの20年余りで、利用インフラは大きく変化しました。行き交うデータ量は膨大になり、それを一瞬で転送する仕組みが出来上がり、端末が処理する速度も飛躍的に向上しています。そしてスマホとSNSの普及でいつでもどこでも人と人が繋がれる技術が一般化し、次は5G時代に入ります。もちろんARやVR技術は今後も進歩を続け、新たなサービスが作り出されていくこととなるでしょう。それでも、人間はそれで満足するとは思わない、と折田は続けます。「さわった感じやにおい、またそれらが合わさった感覚までも再現するのは、当面まだまだ難しいと思います。今後はより一層、『本物』に直接出会うことが持つ価値が上がるかもしれませんね」。

また、今年は大勢が遠隔接続を試みたからこそ見えたことがあるようです。「リモートでリアルタイムコミュニケーションすることが、苦手と感じる人もいるということです。やってみると、長時間はつらいなと私自身も感じることがありました。アクセスする場所など、個々の状況を考えたフォローが必要です。また、実際に会ってやり取りされる情報は、言語にならないことも含めて、いろいろあるのです。映像と音声でのやり取りだけでは伝わっていないことがあるかもしれない、ということも忘れてはいけません」。いつでもどこでも誰とでもつながる時代だからこそ、より一層相手の状況を推し量ったコミュニケーションが大切になります。先の話だと思っていた未来が、新しい生活様式を経てスピードを上げて近づいてきているのかもしれません。

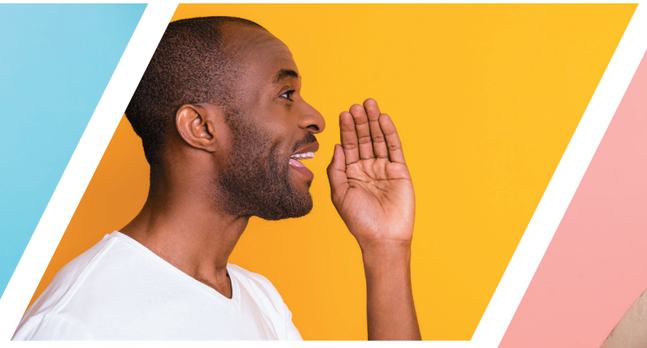
経済学部 経済学科 准教授 山下 里香

社会とことばの関係

社会背景に合わせて移ろう、ことばの使われ方

元々言語学に加えて文化人類学に興味があったという山下の研究は、偶然訪れた日本国内のモスク（イスラーム教の礼拝堂）から始まりました。モスク内でウルドゥー語（パキスタンの言語）、日本語、英語という3つの言語がミックスして使われていることに興味をもったのです。「日本で日本語を話す多くの人の感覚からすれば、3つの言語を話せたとしても、混ぜて使うことはあまりよく思われていないですよね。しかし研究の一環で会話のデータを聴くと、ある種の規則性がある。彼らは、日本社会とは全く違う言語規範を持っていたわけです」。

しかし、その後このモスクの教室での言語規範は徐々に変化してきます。最初の調査から2~3年ほどで日本語化が進んだのです。話者が置かれる社会環境や文化的背景の変化が、日々当たり前のように使っている言語の使われ方に影響を及ぼした、と山下は考えます。「モスクには大人も子どもも出入りしているのですが、大人と比べて子どもは日本の学校で教育を受けているので日本語が堪能です。モスクではウルドゥー語を使うことが必須ではないこともあり、子ども達に合わせる形で大人がコミュニケーションを行い続けた結果、徐々に言語の使われ方が変化していったようです」。



バイリンガルにタメ口…、ことばと話者から見つめる社会性

「バイリンガル（二言語話者）ですか？」と聞かれたら、あなたならどう答えるでしょうか。私は違う…と思った人でも、実は中学校で習ったくらいの英語であれば話せる人も多いはずです。「バイリンガル」ということばがどのくらいのレベルで言語を使いこなせる人を指すか、そのイメージは人それぞれ、さらには文化や社会の違いによって変化します。一つの単語に対しても、人が違えばそのことばを話す人に対して異なるイメージを抱くことがあります。ことばの意味づけやことばを使う人に対するイメージが、どのような社会的な背景やプロセスで生み出されていくのか、この「社会とことばの関係」に注目して研究に取り組んでいるのが、経済学部准教授の山下里香です。

さまざまあることばの中でも、近年力を入れて研究しているのが「敬語」です。「有名な芸能人で、誰にでも“タメ口”で話す方がおられます。ファッションや生活スタイルは参考にするという人が多いのに、『話し方を真似する』という人は見たことがありません。この現象には、日本人がタメ口や敬語という「ことば遣い」に抱く価値観が大きく関係しています。日本では多くの人が『社会人は場に応じて敬語を話せるのが当然』という暗黙の基準を持っているので、芸能人のタメ口を見ても“芸風”だと捉えられてしまうんです」と山下は話します。研究では、実際にTVで放送されたやり取りを細分化し、ちょっとしたことばの使い方や相手の反応などのミクロな会話の流れを分析して、双方がどのように社会的に会話を成り立たせているかをあぶり出すことで、そのことばに対する価値観の作られ方を調べています。

変化して残るもの、変化せず残るもの

伝統文化の衰退や生活スタイルが大きく変われば、全く使わなくなることばも出てきます。社会習慣や文化的背景の変化が及ぼすことばへの影響は、時に言語自体を消滅させることにもつながります。「言語規範の変化には、メディアの影響が無視できません。昔は口伝かラジオ・新聞くらいしかなかったメディアも、今やインターネットでどこでも誰とでも繋がります。流行の伝播はより速くなりましたし、言語がミックスしたり廃れたりしやすくなってきています」。こうして一度消えた言語は、再興させようとしても変化後の文化へ対応させねばならず、簡単には復活できないと山下は言います。

言語は、私たちの生活にとって切っても切り離せない存在です。普段は言語が持つイメージの違いやルールなど鑑みることなく過ごしているものの、そこにはこれまで私たちを取り巻いてきた文化的影響が色濃く反映されています。昨今はローカルにいるままグローバルな文化に触れられるようなデジタル技術が、新たなメディアとして一気に普及しつつあります。ここから先、文化や社会が直面する変化は、日々使う言語にどのような変化をもたらすのでしょうか。

INTERVIEW 04

看護学部 看護学科 講師 飯尾 美沙

慢性疾患だからこそ、行動を継続してもらうための支援がしたかった

病気とともにある地道な生活を、長い間支えたい

症状の増悪を繰り返し、長期にわたる治療や管理が必要な疾病をまとめて「慢性疾患」と呼びます。中でも喘息などのアレルギー疾患は幼少期から罹患する人も少なくありませんが、小児慢性疾患の治療には周囲の大人のサポートも欠かせません。看護学部講師の飯尾美沙は、小児看護の見地から、慢性疾患の中でも特にアレルギー疾患を抱える子どもとその家族を対象にした、毎日の投薬・服薬や症状の維持・改善に向けた生活行動の支援を研究しています。「慢性疾患は長きにわたって地道な治療を続ける必要があります。もちろん、医師や看護師だけでは対処しきれない部分もたくさん出てきます。そこで、昨今利用者が増えているスマホなどのデジタル端末を利用して、生活の中で治療や管理行動の継続に向けた支援ができるアプリを開発しています」。

研究のきっかけは、看護師時代に抱いたある思いでした。「何度も入院を繰り返すお子さんと親御さんに対して、毎回その場でパンフレットを渡して教育するだけでいいのだろうか、という思いを強く持つようになりました。どれだけ教育しても行動が続かないと意味がありません。慢性疾患だからこそ、行動を継続してもらうための支援がしたかったんです」と、飯尾は振り返ります。

日々の努力を、その場で応援するために

いま力を入れている研究は、慢性疾患を抱える子どもや保護者を支援するスマートフォン用アプリの開発です。実際に患児や保護者に体験してもらい、利用者から得られたフィードバックを元に修正するというサイクルで開発を進めています。スマホの普及前はタッチパネル式パソコンを用いて、開発した専用ソフトを患児・保護者に利用してもらう形で研究をしていたと、飯尾は振り返ります。通院時に専用ソフトを利用して、「薬を忘れてしまうのはなぜだろう？行動が続かないのはなぜだろう？」といった自身の行動の振り返りやそれに対するアドバイスを行います。また、入力されたデータはその場でレーダーチャートに可視化してアドバイスとともに印刷して利用者に提供していました。

当時のソフトで得られた知見は、開発中のスマートフォン用アプリに引き継がれています。タッチパネル式パソコンは通院時にしか使えず、家にいる間は結局子どもや保護者の意識任せになってしまうのが弱点でした。スマホを用いることで、いつでもどこでも日常的に継続して使うことができるのは大きなメリットだと、飯尾は続けます。「慢性疾患は継続して地道に薬を使い続けなければ効果が出ません。なので、少し効果が出たところで油断してはいけません。『継続』という地道な行動に細やかなフィードバックを行うことで、お子さんや親御さんがより治療に対して前向きになれると思っています」。日々アプリを使うことで、日常の様子がデータとして端末に蓄積されます。通院時には見ることのできない普段の様子を医師や看護師と共有できる点もアプリの大きな強みとなっています。

直接寄り添うだけが、看護ではない

日々の行動や生活習慣、服薬の状況を気にしながら長期間にわたって症状のコントロールをし続けないといけない慢性疾患にとって、ストレスとの関係も無視できません。病気に伴うストレスだけでなく、日常に感じるストレスが症状を悪化させることもあります。ストレスという言葉は知っているけど、具体的に何がストレスかを知らない人は、子どもに限らずたくさんいます。ストレスを知って対処方法を自分なりに考えられるようになるにはどうしたらいいか、『ストレスマネジメント』を支援するツールも作って、アプリに反映させています。

自分の健康状態は体調が良い時ほど省みることが少ないものの、日々の自己管理が健康維持に重要であることは疑いようもありません。「看護と聞くと直接的な支援というイメージが強いかもしれませんが、直接的に寄り添うケアばかりではないと思っています。病院では見えない日常生活を「研究」という形でサポートすることで、日々病気と向き合うお子さんと親御さんの豊かな生活につながれば良いなと、願っています」。

トピックス

堀田智哉専任講師が、日本設計工学会奨励賞を受賞

理工学部の堀田智哉専任講師が執筆した研究論文「低トルク円すいころ軸受の開発（ころ大端面にマイクロディンプルを施した場合）」が、公益社団法人日本設計工学会の「2019年度日本設計工学会奨励賞」を受賞しました。この賞は、35歳以下の若手研究者を対象として、学会誌「設計工学」に掲載、発表された研究論文および教育論文のうち、優れた成果を得たものの著者に授与されるものです。

堀田専任講師の専門は「転がり軸受（ベアリング）」の疲労損傷や低トルク化に関する研究など、軸受そのものから潤滑剤，周辺設計まで多岐にわたります。「転がり軸受」は、回転する軸と回転を支える部分に使用されるもので、滑らかな回転で摩擦をゼロに近づけることでエネルギーの消費量を抑えることに加え、回転を支える部分の故障を防ぐ役割もあります。エアコンや冷蔵庫、自動車などの身近な機械にも広く使用されており、見えないところで私たちの生活を支えています。堀田専任講師は「研究の成果が高く評価され、大変嬉しく感じています。研究者としてスタートしたばかりですが、『転がり軸受』の発展が、より便利でよりエネルギー効率の良い社会を作っていくと考えていますので、日々の研究を積み重ねていきたいです」と今後の抱負を語りました。

武田克彦准教授が、自動車技術会よりフェローの称号を授与

理工学部の武田克彦准教授が、公益社団法人自動車技術会「2020年度自動車技術会フェロー」の称号を授与されました。この称号は、自動車にかかわる科学技術に関して多大な貢献をなしている自動車技術会会員に送られるものです。自動車技術会は、1947年に“自動車に関わる科学技術の進歩発達を図り、学術文化の振興及び産業経済の発展並びに国民生活の向上に寄与する”ことを目的に設立された、日本で唯一の自動車関係の学術団体です。世界一を誇る自動車技術の研究を推進するとともに、それを担う人材の育成に尽力しています。また世界38カ国の加盟団体により構成される国際自動車技術会連盟（FISITA）においても積極的な活動を展開しています。武田准教授は、資源リサイクルおよびディーゼルエンジンの排気ガス低減を目的とした、植物性廃食油やアルコールを用いた燃料のディーゼルエンジンへの適用に関する研究を行っています。今回の称号授与を受けて武田准教授は「身の丈にそぐわない名誉に、大変恐縮しております。今後の努力を期待され、フェローとして認定していただけたものと推察いたしておりますので、これまで以上に自動車の技術発展とそれに伴うより良い社会の実現に貢献できれば」と、喜びとともに今後の決意を語りました。

教員自著紹介

趣味とジェンダー「手づくり」と「自作」の近代

人間共生学部
人間共生デザイン学科 教授　**神野 由紀**

素人の趣味の手づくりで共通するのは、みな「作る」のにもかかわらず「非生産的」であることです。中には日曜大工や手芸のように「家族のために」という理由がつけられることもありますが、あくまでそれは建前でしかありませんでした。素人が作ること自体、趣味の範疇であるので、生産性とは相容れないというのは当然かもしれませんが、同じ趣味の人以外にはおよそ歓迎されない手作り品に、なぜここまでお金と時間をかけて没頭するのか、それほど高くない同等の既製の商品が簡単に手に入るのに、なぜ作るのか、そして特になぜ男女でここまで相容れない壁が存在したのか。本書では芸術学や社会学など様々な研究者が集まり、戦後の手作り文化を男女双方の立場から戦後日本の手づくり文化を検証しています。

書　　名：趣味とジェンダー:「手づくり」と「自作」の近代
著　　者：神野由紀（専門分野:近代日本のデザイン史、文化史）
出 版 社：青弓社
出版年月：2019年6月

新敬語「マジヤバイっす」 – 社会言語学の視点から

経営学部
経営学科 教授　**中村 桃子**

本書のテーマは、「そうですね。ヤバイです。」の「です」を「す」と縮めた「そうっすね。ヤバイっす」という話し方だ。

丁寧体の「です・ます」と普通体の「だ」の中間のような「す」は、丁寧さに対する感覚や人間関係も変えているのではないかと考えて調べた。

男子大学生は、後輩が先輩に対して「親しい丁寧さ」を表す敬語として使っている。しかし、ネットでは、「正しい日本語ではない」という意見が多数派だ。一方、テレビCMでは、高感度の高いタレントが「す」を使って、「軽さ」や「いきおい」、さらには、「新しい女らしさ」まで表現しようとしている。

見えてきたのは、さまざまな立場の人が、「す」という小さな音を利用して、人間関係を調整している姿だった。

書　　名：新敬語「マジヤバイっす」 – 社会言語学の視点から
著　　者：中村 桃子（専門分野:言語学）
出 版 社：白澤社、現代書館
出版年月：2020年3月

食べることへの支援:住み慣れた地域で自立した生活を送るために

栄養学部
管理栄養学科 教授　**田中 弥生**

［基本情報編］日本が超高齢社会となった背景、差し迫った課題の中で「食べること」に焦点を当て、最期まで口から食べることを支援する内容です。在宅を始めとしたサービス内容の進歩、病院・福祉施設・在宅介護などの質の向上と食を通しての自立支援の理解に役立つ1冊としてお読みください。
［実践情報編］介護と関連する疾患・病態、食事について、実践的に解説。摂食嚥下障害の評価・判定と具体的な対応、COPD・糖尿病・脂質異常症・高血圧・慢性腎臓病・がんの緩和ケア・低栄養・過栄養・褥瘡・認知症など、事例と共に実際の食支援を学べる1冊です。

書　　名：食べることへの支援
　　住み慣れた地域で自立した生活を送るために
著　　者：〔基本情報編〕
（執筆順）　田中弥生／田中友規／熊谷修／竹田すずよ／手塚順子／藤原恵子／入澤いづみ／入澤治子／門馬恵理子／前田佳予子／本川佳子／細山田洋子／栗原明子
　　〔実践情報編〕
　　田中弥生／小城明子／西村一弘／奥田奈賀子／佐藤高雄／手塚順子／宮司智子／内藤有紀子／百木和／工藤美香／池田優／増田邦子／田中朱美／下浦佳之
出 版 社：第一出版
出版年月：2019年7月